



Title	差別意識の形成と解消が未成年の学力に与える短期的・長期的な影響
Author(s)	
Citation	令和4（2022）年度学部学生による自主研究奨励事業 研究成果報告書．2023
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90959
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

令和 4 年度「学部学生による自主研究奨励事業」研究成果報告書

ふりがな 氏 名	さかべゆいと 坂部結生翔	学部 学科	人間科学部人間 科学科	学年	2 年
ふりがな 共 同 研究者氏名		学部 学科		学年	年
					年
					年
アドバイザー教員 氏名	高田一宏 教授	所属	大阪大学大学院人間科学研究科		
研究課題名	差別意識の形成と解消が未成年の学力に与える短期的・長期的な影響				
研究成果の概要	研究目的、研究計画、研究方法、研究経過、研究成果等について記述すること。必要に応じて用紙を追加してもよい。（先行する研究を引用する場合は、「阪大生のためのアカデミックライティング入門」に従い、盗作剽窃にならないように引用部分を明示し文末に参考文献リストをつけること。）				
{研究概要} 他者に対する優劣意識を促進させるような教示文と、数字列による暗記課題を用いて、一時的に差別的感情を作り出すことが可能であるのか、また優位感情・劣位感情にある状態とでは学習に対する取り組みに違いはあるのかを調べた。 なお、当初の案では対象者を中学生・高校生としていたが、実験の方法として差別的感情を助長するような文言を含める必要があり倫理的な問題があった。そこで、実験自体が差別の再生産とならないよう配慮し、研究対象を大学生に限定し、また長期的な効果についてではなく実験による一時的な効果をみるにとどめた。 この研究において、差別の定義は「明確な根拠無しに特定の他者に対する不当な行為または態度をとること」とし、特に、他者に対する優劣意識に焦点を当てた。また今回は、学習に対する取組について、暗記課題に取り組む態度とした。 {研究目的} 教示文によって一時的に他者に対する差別的な優劣感情を喚起することができるのか、また優位感情を喚起する場合と劣位感情を喚起する場合とでは暗記課題に対する学習態度と効果について影響があるのかを検証した。 {研究方法} アンケートツール Qualtrics を用いて教示文の情報に基づいて成績順位を予想させる行動と暗記課題とを複数回交互に行った。アンケート内での実験順序は、主に次のようにした。 1, 実験説明・参加の同意・識別用メールアドレスの入力 2, 暗記課題についての説明 3, 優位感情喚起課題（順位予想） 4, 暗記課題 5, 劣位感情喚起課題（順位予想） 6, 暗記課題 7, 優位感情喚起課題（順位予想） 8, 暗記課題 9, 劣位感情喚起課題（順位予想） 10, 暗記課題					

1 の項目では、実験への参加が任意であること、メールアドレス以外の個人情報を収集しないことを明記し、メールアドレスの入力を以て実験への参加に同意したとみなした。

2 の項目では、4, 6, 8, 10 の項目で用いる暗記課題についての説明をした。今回行った暗記課題は、ランダムに作成した 5 つ・3 桁の数字列を 1 セットとし、1 試行毎に一定時間呈示した直後に記憶した数字列を並び順とともにできるだけ正確に回答してもらうというものとした。呈示秒数は 20 秒、回答の制限時間は 60 秒とし、制限時間が来次第、自動的に次の項目に移動するよう設定した。回答は記述式とした。

3, 5, 7, 9 の優位・劣位感情喚起課題について説明する。試行毎に暗記課題の直前に架空の参加者 a,b,c,d と e,f,g,h の計 8 人を想定して、優位感情を喚起する試行では a,b,c,d と参加者自身を含めた 5 人、劣位感情を喚起する課題では e,f,g,h と参加者自身を含めた 5 人の内で、画面に提示された情報を基に直後に行う暗記課題の成績順位を推測させた。具体的には、優位感情の喚起では推測の前に、d が最下位で参加者が上位 2 位以内となるようランダムにした a,b,c,d の順位を提示し、劣位感情を喚起する場合は h が上位 2 位以内、参加者が最下位となるようにした上でランダムに設定した順位を提示した。慣れによって暗記課題の正答率が影響を受ける可能性もあり、また順位予想の項目へも慣れってもらうため、3, 4, 5, 6 の最初の 4 回を練習用の課題として設定した。

試行回数について、実験の流れとしては主に上記に示したように 1 から 10 の順番で行ったが、3, 4 は交互に 2 回ずつ、5, 6 は交互に 2 回ずつ、7, 8 を交互に 5 回ずつ、9, 10 を交互に 5 回ずつ、この順番で連続して行った。以下の図 1 は上記で説明した優・劣位感情喚起課題の項目の実際の画像である。同様に図 2, 3 は暗記課題で用いた実際のフォームの画像である。

また、暗記課題の成績について優・劣位感情喚起課題の有り無しによる条件の違いをみるため、対照実験として、3, 5, 7, 9 の優・劣位感情喚起課題を省いた暗記課題のみのフォームも別途作成した。

Q1

テストに進む前に、a,b,c,dとあなたを含めた5名で、テストの成績が高い方から低い順に順位をつけるとします。
この後行う1回目のテストで、5人の順位がどのようになるか予想していただきます。なお同点はないものとします。

以下はa,b,c,dの平均点から見た順位です。予想の参考としてください。

1位a
2位c
3位b
4位d

Q2



次のテストでの5人の順位を予想してください。

	1	2	3	4	5
あなた	☐	☐	☐	☐	☐
a	☐	☐	☐	☐	☐
b	☐	☐	☐	☐	☐
c	☐	☐	☐	☐	☐
d	☐	☐	☐	☐	☐

図 1 優・劣位感情喚起課題のための教示と順位予想項目

次の数列をできる限り一つずつ正確に覚えてください。

A : 821

B : 400

C : 884

D : 183

E : 276

図 2 暗記課題（暗記する数字列の呈示項目）

A

B

C

D

E

図 3 暗記課題（記述式回答欄）

作成したフォームは大阪大学人間科学部 1 年生、2 年生、3 年生が所属する学年 LINE グループにそれぞれ投稿し、任意参加として参加者を募った。なお回答した参加者全てに 300 円分の email タイプによるギフトカードの謝礼を 12 月中旬頃に送付すると明記した。回答募集期間は 2022 年 11 月 17 日から 12 月 1 日とした。なお、実験は対照実験を加えて 2 種類別々にフォームを作成し、どちらか一方のみに参加するよう伝えた。

{研究成果}

優・劣位感情喚起課題の有る実験では合計で 4 件の回答が得られた。対照実験である実験 1 では完全な回答が 0 件であったため以下では省略する。

・結果

以下は優・劣位感情喚起課題での予想された順位の平均値を試行毎に示した図 4, 5 と、暗記課題の完全正答率と部分正答率を試行毎に示した図 6, 7 である。順位予想については参加者自身を y と表記し、それぞれ予想された順位の推移を整理した。

優劣意識の形成を目的に用意した順位予想について図 4 を見ると、参加者の順位を優位とした試行 1 回目から 5 回目では、参加者が回答した自身の順位の平均値は 1.85 位となっており、常に最下位に設定していた d の平均順位は 4.95 位であった。また参加者の順位を劣位とした試行では、参加者自身の順位の平均値は 3.65 位、常に上位に設定していた h の順位は 2.10 位であった。図 4 では参加者 (y) と d の順位は 1 試行目から 5 試行目まで一定であり推移はみられない。同様に図 5 でも参加者 (y) は 1 試行目から 5 試行目まで一定であった。しかし図 5 では常に上位 2 位以内に設定した h の順位の予想が 1, 2 試行目では 2 位以内であったが 3 試行目からは 2.50 位付近に下方へ推移している。またランダムに順位を設定していたはずの e,g は共に 2 試行目以降下方へ推移しており、また f も上方への変化が見られる。

暗記課題の正答率については回答された数字列が呈示された数字列と一致した場合に 1 問につき 1 点の得点を与えた場合の完全正答率 (計 20 点で 100%) と、回答された数字列が呈示された数字列と 1 桁目から 1 文字ずつ一致している場合に 1 点を与えて合算した部分正答率 (計 60 点で 100%) とに分けて算出した。試行毎に整理すると図 6, 7 のようになった。

優・劣位感情喚起課題ともに 1 試行目から 5 試行目にかけて完全・部分正答率ともにやや上方に推移しているが、両者に明確な差はみられなかった。

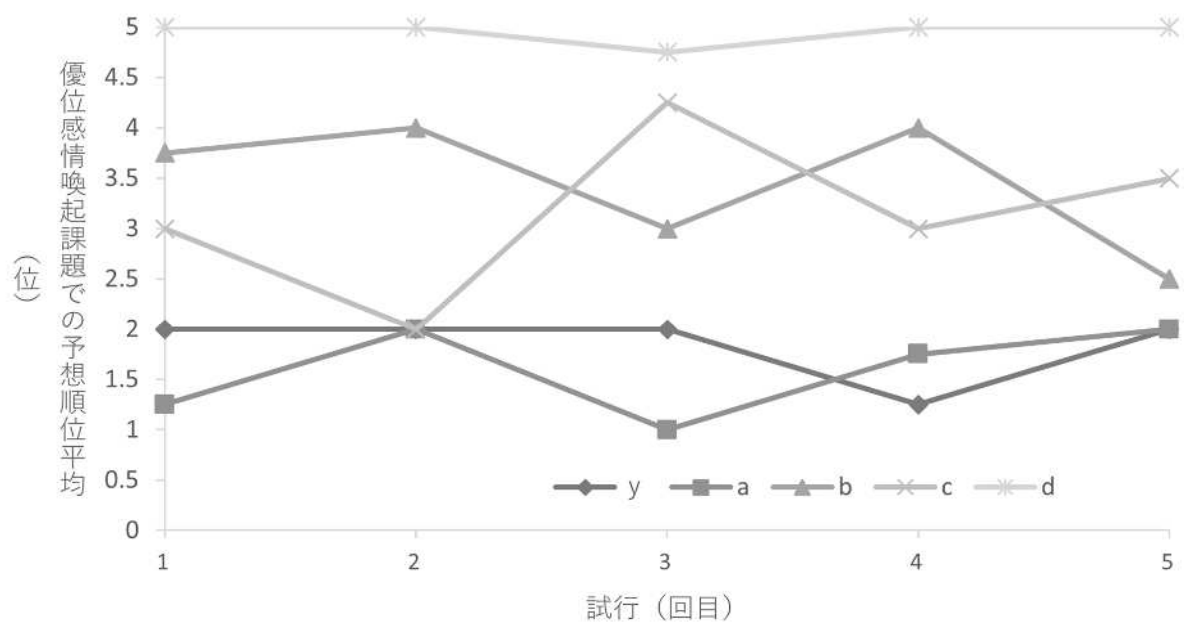


図 4 優位感情喚起課題での予想順位平均

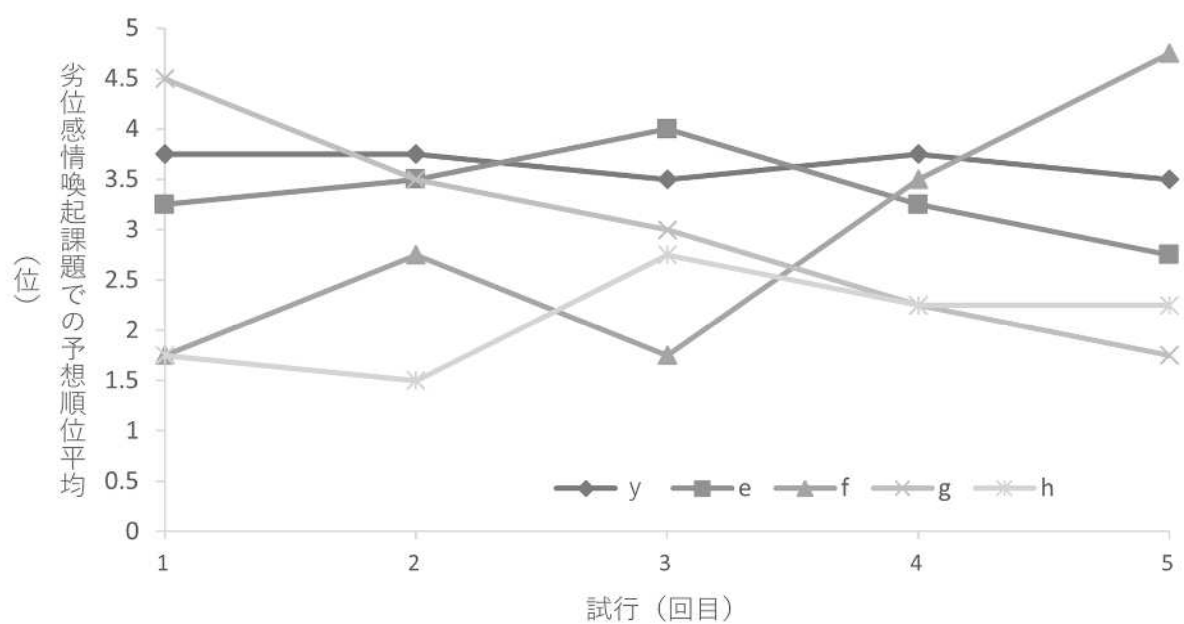


図 5 劣位感情喚起課題での予想順位平均

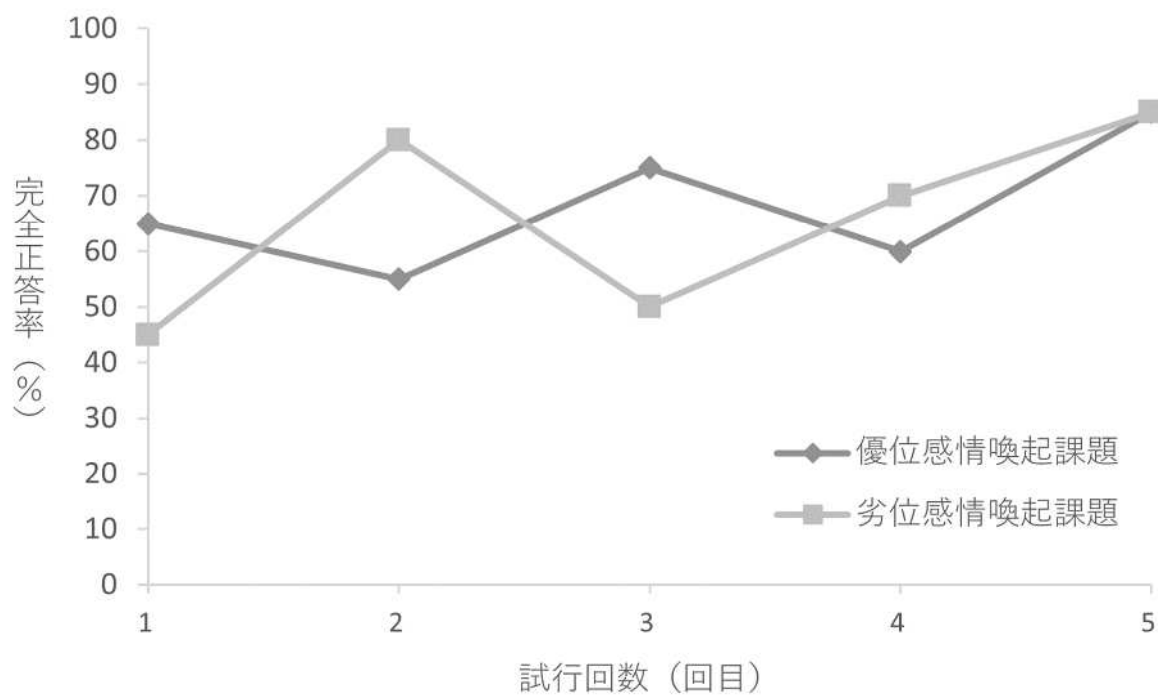


図 6 暗記課題の完全正答率の推移

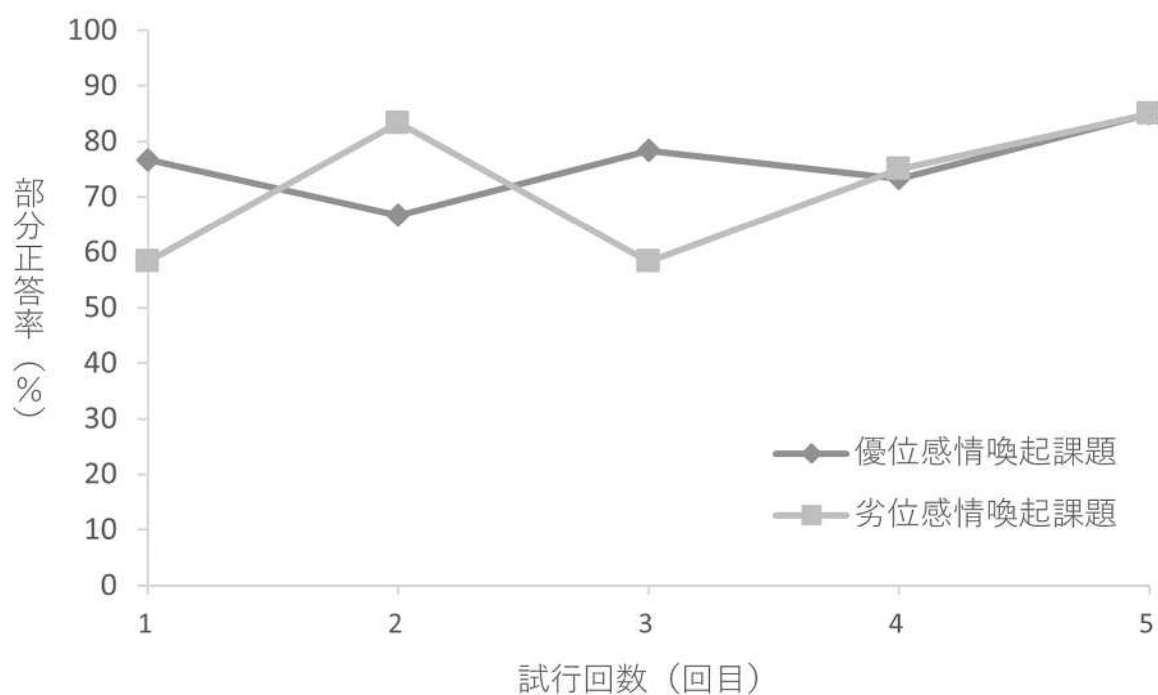


図 7 暗記課題の部分正答率の推移

・考察

優位感情喚起課題では最下位の d の予測順位は常に最下位となっており無意識的な格付けは起きていたと言える。参加者自身の予測順位も上位 2 位以内にあるように、こちらも優位感情を喚起できていたと思われる。劣位感情喚起課題では常に最下位の情報を提示したはずの参加者自身の予測順位は下から 2 位以内であり、常に最下位と予想された d とは対照的である。また上位に設定した h の予測順位も上から 3 番目以内ではあるが、常に上位 2 位以内に予測された参加者とは異なる。同じく常に最下位に調整された d と参加者であるが、予測された順位では d は常に最下位だと推測されたのに対し参加者自身は下位 2 位以内ではあるが最下位とはされなかったことから、明確な根拠のない状態で特定の他者に対する不当な態度・行為が実験の教示文によって生じていたことが推察される。しかし、教示文によって優劣意識が形成されていたのであれば試行回数が増えていくにつれて予想順位に変化が現れてくるはずである。よって図 4, 5 のように一定の順位がとられていることから、教示文によって優劣感情が喚起されたのではなく、実験参加者は他者に対しては呈示された情報を基に妥当な予測をするが、自身が不当な順位にある場合は予想が妥当なものとはならない傾向が初めからあると考えられる。

図 5 では順位をランダムに設定していた e, g に全体的な下方への推移、f の上方への推移がみられるが、これはランダムな順位設定が上手く行えていなかった可能性がある。参加者自身 (y) と劣位に設定された d、優位に設定された h の以外の架空の人物達の順位が一樣にばらけていなかったために上記で示したように、劣位状態に設定された参加者自身の順位を d と同じように最下位と予想はしなかった傾向が生まれてしまった可能性がある。

暗記課題の成績については優・劣位感情喚起課題どちらの条件においても平均点に明確な差はみられない。しかしどちらも 4 試行目、5 試行目においてほぼ同じような上方への推移が見られる。この点については、教示の効果が現れたのではなく実験終了が近づいているという意識が課題への意欲を起こしたのではないと思われる。

順位予想については優・劣位感情喚起課題について回答に差がみられるが、暗記課題の成績には両者に違いが見られない。よって今回の教示文による実験は、優劣意識を喚起する効果がある程度みられるが、暗記課題という学習に対する態度について今回の実験で創り出した優劣意識は影響を及ぼしていないと言える。

{今後の展望}

十分な回答数が集められなかったことに対しては、参加者が実験に要する時間が長かった点、時間に見合った謝礼を用意できなかった点、今回の実験とは他の研究活動の調査期間が重複してアンケート調査が乱立していた点が挙げられる。本実験を構想するに当たり、差別的な感情を喚起させる教示文とアンケートフォームの作成に時間を取ってしまい、十分な調査期間を確保できなかったことからこのような結果になってしまったと思われる。十分な回答が集まらない可能性が見られた時点で、代替案を事前に用意していれば、また参考となる先行研究を用意していれば十分な回答を得る機会があった。これは今回の一番の反省点である。

本研究では一時的に差別的な感情を喚起するための方法としてロールプレイングを用いる案や、特定の社会的属性を指す言葉を用いた教示文を使った実験案もあった。しかし、差別をテーマとした以上特定の属性に対する差別を助長しないよう十分な配慮が大切であったが、実験の構想段階で適当なものを考案することができていなかった。差別的な感情と学習効果との関係を調査するにおいて、特に実験参加者が就学児童の場合は実験によって差別の再生産が起きないように工夫が必要であるが、一方で十分な差別的な感情を喚起しなくては学習態度に及ぼす効果が得られないだろうと考える。

今回は特定の他者に対する直接的な表現を用いずに優劣感情を喚起するような教示文を作成し実験を行った。十分な回答を得られなかったものの、実験によりある程度の差別的な感情を一時的に喚起できる可能性がみられた。

ジェーン・エリオット氏による「青い目茶色い目」で知られる実験授業では小学生達が優位な立場にあるときはテストの成績が高く、劣位な立場にあるときはテストの成績が低かったが、授業終了後に差別意識を解消させるような指導を行った後に取ったテストではクラスの生徒全体が授業前よりも高い点数を取ったとの情報がある。今後、倫理的に問題なく且つ十分な差別的な感情を一時的に創出することが可能であれば、自身の所属している集団内で優位に立っている状態・劣位に立っている状態・どちらでも無い（創出した差別感情を克服した）状態の 3 つの群を想定してそれぞれ学習に向かう姿勢に異なる影響を受けるのかを今後調べたいと思う。

{参考文献}

青い目茶色い目：人種差別と闘った教育の記録 / ウィリアム・ピーターズ著；白石文人訳．－東京：日本放送出版協会，1988．－(NHK ワールド TV スペシャル)